野外彫刻プロジェクトはつづく

アートの現場から ACAC通信

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、1月24日から2月いっぱい臨時休館となった当館ですが、その間も2021年度に行った展覧会や、アーティスト・イン・レジデンス（滞在制作）の活動をまとめた記録集や機関誌など、アーカイブの製作に勤しんでいました。また、感染予防に努めながら、4月16日から開催を予定している写真家・美術家の松本美枝子さんの個展「具（つぶさ）にみる」の準備も進んでいます。松本さんは四季折々の表情が豊かな青森を1カ月間ずつ3回に分けて訪れており、地域の方々との関係性を育みながら作品制作を続けてきました。松本さんが拠点とする茨城県は、日本で最も古いとされる5億3300万年前（カンブリア紀）の地層が発見されたことでも有名ですが、今回は地質が人々に及ぼす影響などについても彼女なりの考察を加えながら、青森の風土について再考させられる機会となりそうです。

延期されていたトークやワークショップなどイベントの数々も、3月からは再開する予定です。予定していた会期まで一般公開を続けられなかった小田原のどかさんの個展「近代を彫刻／超克する―雪国青森編」（12月25日～1月23日）でしたが、多様なジャンルの芸術を紹介し、様々な方に参加していただく取り組み「表現のコモンズ」での「表層／地層としての野外彫刻プロジェクト『ここにたつ』」の一環として開催していました。小田原さんのリサーチによって、青森県内にある公共彫刻、特に近代日本の姿を映し出しているモニュメントの数々に光があたり、彫刻論が展開され、国家論に触れると同時に、私たちがそれをどう見ることが可能かということも試された展覧会であったと思います。

「あいちトリエンナーレ2019」での津田道子作品展示風景
撮影：怡土鉄夫

このプロジェクトは、次年度以降も関わるアーティストと注目する対象を変えながら続きます。3月18日の午後5時半からトークイベントを予定している津田道子さんは、2010年度に当館で滞在制作をした経験のあるアーティストです。映像作品やパフォーマンスなどでそれぞれのメディアの特性に着目し、時空間や存在にアプローチしてきました。今回は青森市内の公園などにある野外／屋外彫刻や、美術作品としては見なされていない物体にも目を向け、それらと私たちの関係を変えてしまうようなオーディオガイドを共同制作する予定です。オーディオガイドの制作は、ワークショップ形式で行います。どこに何があり、それによって人は無意識にどう動いているのか。見えるものも見えないものも含めて、このまちにあるどのようなものを面白いと思っているかなど、参加者の方々と一緒に、オーディオガイドのあり方を考えるところから始めていきたいと思っています。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員　慶野結香）

※第1金曜日掲載